苔庭見学記

飄々

広報委員

岸本　千種

近所の書店で「京都、美しい苔庭さんぽ　心にしみる苔景を、見る・知る・学ぶ」という背表紙が目についた。京都のガイドブックでも苔をテーマにしたのは珍しいので買った。京都の苔庭の写真が美しく紹介されており、心が落ち着く。著者は庭園デザイナーの烏賀陽百合（うがやゆり）さん。

まず知ったのは苔庭のスタイルで、「池泉の庭」と「枯山水庭園」の違いである。

池泉の庭は、平安時代の極楽浄土思想を表現している。広大な池泉に島を作って華やかであり、散策もできる。

一方で枯山水庭園は室町時代、禅宗の影響で発展した。水を使わずに、石を動物や自然の景観になぞらえる。水の流れは砂紋で表現され、石に添えて随所に苔をあしらう。室内や縁側から鑑賞する。

この本で紹介されている京都のお寺では、東福寺に去年の秋に初めて行った。広大な敷地と多くの人出に驚き、有名な通天橋を渡れただけで満足し、庭園は見学しないまま帰ってしまった。

後で復習して、東福寺本坊の東西南北４つの庭園が素晴らしいことを知った。特に北庭の「小市松模様の庭」の写真に目が惹きつけられた。正方形の庭石と苔が市松模様に並んでいる。シンプルで幾何学的で、日本庭園の先入観を覆された。

円筒形の石柱で北斗七星を表現している東庭も興味深い。いずれも重森三玲氏という昭和時代の有名な作庭家が作った。三玲（ミレイ）という名前の響きも美しい。

この本に、全国苔庭インデックスがあり、７か所が紹介されている。ここに周南市の漢陽寺が登場しており、「重森三玲が作庭したすばらしい庭園がある」との説明があった。

漢陽寺は周南市鹿野にある臨済宗の由緒ある寺院だ。行ったことはあるが、重森三玲氏の有名な庭園という価値が私にはよくわかっていなかった。しっかりと拝見しようと思い、10月の連休に行ってみた。鹿野インターに近く、舗装された道路だけを快適にドライブして行けた。すぐ横に駐車場も整備されており、石段も少なくて脚力に自信がなくても拝観できる。本堂も明るく風通しが良く、落ち着いた雰囲気で、拝観させていただいた。

本堂と書院を囲んで四面に庭園がある。本堂裏側にある潮音洞（水を引き込むトンネル）から流れ出る豊富な遣り水を活かした「曲水の庭」が有名である。実際に優雅で多彩な表情の庭園であった。平安時代には貴族が曲水に盃を浮かべて詩歌を作った。

鎌倉時代様式の「蓬莱山池庭」や「九山八海の庭」も岩や背景の山裾が力強く、緑色の苔の柔らさが調和していた。

石と砂紋だけで、地蔵菩薩が子供たちと遊ぶ様子を表した「地蔵遊化の庭」も、手を繋いで輪になっているように見えて、石なのに可愛らしさを感じた。

「瀟湘八景（しょうしょうはっけい）の庭」は非公開である。水墨山水画の代表的な画題である中国の水郷の地の八景を現代様式の枯山水庭園として作庭しているとの説明文と、斬新なデザインの写真を見た。非公開の庭園もあることで、いっそう奥深く、ありがたさが

増した気がした。雪の時もまた美しい景色が味わえるのだろうと想像する。

漢陽寺の周囲にある「清流通り」も端正で散策しやすく、流水の音に心が落ち着いた。

山口の庭園と言えば、雪舟庭を思いつく。改めて見たくなって10月末に常栄寺へ行った。

池泉回遊式庭園の雪舟庭は、この日も変化に富み華麗で満足した。本堂に座ってじっと拝見している人や、庭園内を散策する人で賑わっていた。

続いて本堂の南側に回ってみると、長方形の枯山水の庭があった。本堂から立って見るので庭全体を俯瞰して見降ろすようになる。渦巻き模様の砂紋が鳴門の渦潮みたいで、石は対角線を示すようにX字状に配置されている。苔による築山が、本堂側の方が高くなっていて島や陸地を思わせる。

案内板に「この南溟庭（なんめいてい）は重森三玲氏が昭和43年に作庭した。テーマは雪舟が明へ往復した海。」と書いてあった。ここにも重森三玲さん、と驚いた。

京都の苔庭をきっかけにして、山口県の苔庭の魅力を再発見できた。

苔は雨水を吸収し、いったん蓄えてから少しずつ放出することで周囲を潤してくれる。

苔は大気中のCO_2も吸収し保存してくれる。特にミズゴケが代表的である。他にもスギゴケ・ヒノキゴケ・シノブゴケ・シッポゴケなど、いろいろな可愛い名前の苔がある。

ずっと緑色のままではなく、季節や環境で色が変化する。枯れたみたいに見える休眠期もある。乾燥すると呼吸も光合成もストップして休眠し、再び水分が得られるまで、何か月も「死んだふり」で過ごすそうだ。

小さく頼りなげで、美しい花も咲かないし、食用にも飼料にもならない。地べたに張り付いている地味な植物と思っていた。実際は生存能力が強く、地球環境にとっても役に立っている働き者であることを知って、苔のファンになった。